パレット・レター

2018 September No. 9

特集 あったか子育てセミナー

「不登校の子どもたちへの理解と対応について考える」

2018年9月3日発行

「プール交流」をしました。

――児童発達支援センター

児童発達支援センターでは、利用者と保育園との交流を図るために、提携している中曽根保育園との「交流保育」を行っています。

今回は、園のご協力により、プール交流をすることができました。

当日は、参加した7名の親子と職員で一緒にプールに入り、水中に沈めた貝殻のオモチャを拾ったり、ワニになって水中を歩いたり、宝石拾いをしたりとプール遊びを楽しむことができました。

さらに園庭には、シャボン玉や片栗粉、スライムなどで遊べるコーナーを用意してくれていて、プール以外にも沢山の遊びを経験させてもらえました。

「金太郎（飴風）クッキー」を作りました。

――東部子どもホーム

「金太郎飴を作ってみたい」というフリータイムの利用者さんの言葉からスタートした企画ですが、飴は難しいので、クッキーで作ることにしました。

図書館から借りた本を参考に、まずは紙粘土で練習してから本番に望みました。

茶色はココア、緑は抹茶、それ以外の色は食紅を混ぜることで、それぞれが必要な色の生地を作りました。

しかし生地を成型しやすい固さにするための温度調整が難しく、予定よりも時間を要したため、大作に挑戦した人は家庭で作業の続きをしてもらうことになりました。

職員も、見本用に抹茶味の「パレットン」とプレーンの「P」の金太郎クッキーをつくりました。金太郎飴のように1つひとつ表情が違い、面白いものが出来上がりました。

子ども若者発達支援センター会報

パレット・レター

- 発 行 -

四国中央市子ども若者発達支援センター

TEL 0896-28-6029　FAX 0896-28-6030

palette@city.shikokuchuo.ehime.jp

カラー版のパレット・レターはこちらで見いただけます

Palette公式フェイスブックはこちら

Paletteまたはパレット・レターに関するお問合せは上記まで。

パレット・レターの表紙になってくれるお子さんを募集します。
ご協力いただける方は、Paletteの職員または上記までご連絡ください。

「不登校やひきこもりの子ども・若者たちは、小さな哲学者である。」

今年もあったか子育てセミナーを開催しました。

8月8日に開催された今年度のセミナーは、「不登校の子どもたちへの理解と対応について考える」というテーマで、元香川大学教育学部教授　小柳晴生(おやなぎ・はるお)先生にご講演いただきました。

「不登校の問題が現れてから60年が経過したが、現在もはっきりした原因がわからず、対応方法も様々である。今回の講演の内容について、「違う」と思う人がいても当然である。皆で一緒に考えていこう。」という先生のあいさつで講演は始まりました。

講演では、不登校にこめられた、子どもたちからの

「こんな私でも、
生きていていいですか」

という沈黙のメッセージを、正確に読み取ること、そして親子や相談機関が適切な関わりをもつことなど、わかりやすくお話しいただきました。

会場からは、不登校児との接し方や、自らの実体験に基づくたくさんのご質問やご意見をいただき、盛況のうちに幕を下ろしました。

「不登校は、現代社会で適応的といわれる生き方、価値観、生きる速さに対して疑問を呈し、私たちがこれからどう進むか貴重な手がかりを示している。」

「不登校やひきこもりの子ども・若者たちは、小さな哲学者である。」

という先生の言葉を真摯に受け止め、今後の支援につなげていきたいと思います。

あったか子育てセミナーとは ?

平成20年に「あったか子育て連続セミナー」として始まった本セミナーは、今年で11年目を迎えました。このセミナーでは次の6つを目的に開催しています。

1. 四国中央市の全ての子どもたちが、周りの人から理解を得ながら、その子らしく成長していけること。
2. 四国中央市の全ての保護者が、四国中央市で子育てをしてよかったと思えること。
3. 保護者や支援者が、子どもたちのことを正しく理解し、その子が「自分は自分でいい。」と肯定でき、自分や他人を大切に思えること。
4. 四国中央市の子どもの育ちに関わる支援者が、子どもや保護者の気持ちに寄り添いながら、その成長を見守っていけるような関係を、保護者や子どもと築けること。
5. それぞれの支援者が、自分自身との出会いが子どもたちの人生にとって、かけがいのない出会いであるかもしれないという気持ちを持って、やりがいを持ってその職務にあたれること。
6. 子どもたちが周りの大人に正しく理解されないことによっておこる二次障害を絶対に防ごうという強い気持ちを、支援者がもつこと。